

士族層の解体と教育移動の研究 (その1)

———旧S藩における事例———

天野 郁夫 (東京大学) ○浜名 薫 (上智大学大学院)
 園田 英弘 (国立民族学博物館)○広田 照幸 (東京大学大学院)
 森 重雄 (東京大学)

1. 趣旨

この研究は、一地方都市における階層再生産構造と教育の関わりあいを、文献・インタビュー調査などによって総合的に明らかにしようとする試みの一部分をなすものである。従来、教育の社会移動に果たす役割についていち早く気づき、かつ利用したのは旧武士層であったと言われてきた。没落しつつあった旧武士層の人々は、過去の社会的地位の回復を目指し、唯一の教養階層であることを利用して教育を「立身出世」の手段とみなしたとされる。確かに、多くの研究が明らかにしているように、明治期における高等教育機関は人口比からすれば非常に不自然なほど多くの旧武士層出身者に占められていた。

しかし、一方で旧武士層は急激な社会的没落ゆえに、最低限の生活に甘んじざるをえず、とても高等教育をその子弟に受けさせる余裕などなかったとする経済史的あるいは社会政策学的なデータも見出す事ができる。この2つの分裂するイメージは、旧武士層という社会集団の理論的・実証的検討が不十分であったところからきている。すなわち、武士層は解体される以前は一つの身分階層として存続していたが、明治維新以降においてはそのような基盤を失った。たしかに、明治のある時期までは旧武士層は伝統・価値観・人間関係などを共有していたものの、それはもはや一つの社会階層といえるような存在ではなかった。従来の2つに分裂した旧武士層イメージは、一方に於て主に中央レベルで把握できる高等教育を受けている旧武士層から、最初の教育利用階層としての「士族」イメージを作り、他方で没落しつつある貧困な旧武士層から都市労働者の第一世代や日雇い層の一つの出身母体としての「士族」を想定した。もはや一つの社会階層としての実態も社会集団としての実質もない旧武士層を、一つのものとしてトータルに把握しようとしたために生まれたのが「士族の出世主義」という過度

の文化主義的解釈であった。上昇移動しつつある旧武士層の人々も没落しつつある旧武士層の人々も、共通して持っているのは文化である。文化が、上昇移動の手段として教育機会を積極的に利用するのになんらかの関係があったことは確かだが、余りに文化主義的な解釈は社会・経済的要因を見落す結果を生む。

そこで、問題となるのは次の点になる。「失った社会的地位の回復」と「貧困」と「教育機会の利用」とがどのような関係にあったのか。「貧困」が教育を社会移動の手段とみなすバネになっているのだとすれば、それは旧武士層のどのような階層出身者であろうか。また、貧困にもかかわらず長期の教育が受けることができたのは一体なぜか。「失った地位の回復」が目的ならば、旧体制下で高い社会的地位を占めていた層ほどより熱心に教育機会を利用しようとしたと思われるが、それは果して事実であろうか。このように、確実な実証的データの裏付けなしに極めて印象主義的に論じられてきた旧武士層の教育利用の実態は必ずしも明らかにされていない。

この研究では、近畿地方の一小都市(旧城下町)に残されている旧士族の交流団体(懐旧会)の会員名簿、活動記録、その他を用いて、教育機会を利用した最初の社会集団といわれる旧武士層と教育の関わりあいを実証的に明らかにすることを目的としている。懐旧会は明治13年に組織され、戦前期いっぱいまで活発に活動を続けていたが、戦後自然消滅してしまった。今回の中間報告的発表では、我々が見つけた文献資料類を用いて明治中期までの資料紹介と分析を行いたい。

2. 先行研究

従来、旧武士層という社会集団については教育社会学に限らず多様な学問分野から、それぞれのアプローチでとりあげられてきた。

我々の研究は欧米の社会移動史研究と深い関連を持つと考えるが、それは注にまわし、ここでは日本の士族研究について述べる。

1：士族授産史研究

研究としては経済史・社会政策史などに代表されるが、研究関心は明治10年代前半に実施された一連の士族授産の状況と当時の士族の貧窮状態に収れんしており経済的状況を基軸として、旧武士層が明治10年代において没落・解体しつつあったことを強調する結果を残している。

代表的研究としては、吉川秀造「士族授産の研究」(昭10)、我妻東策「士族授産史」(昭10)、藤井甚太郎の一連の論文などがあげられる。

2：社会政策学研究

明治前期における労働者階級形成過程の一側面として士族のプロレタリア化、賃労働者化を位置づけた研究。1の研究を一步進め、旧武士層の解体が新たな労働者階級の創出と関連づけて分析している点に特徴がある。

隅谷三喜男「日本賃労働史論」などがその代表的なものとしてあげられる。

3：士族意識研究

日本の近代化の指導層としての士族に注目し、士族意識や武士的エートスが近代化の歩みにどのような功罪を残したかを研究したもの。

福地重孝「士族と士族意識」(昭31)、高橋哲夫「明治の士族」(昭55)、など歴史学からのアプローチが主である。

4：族籍制度研究

封建身分が族籍制度へと政策的に再編される過程を制度史に関心をよせながら分析している。

制度に関心が集中しすぎ、実態としての武士の二・三男問題などへの注意が払われていない。

深谷博治「華士族秩禄処分の研究」(昭19)、松本勝三「明治初年における華士族研究」(昭25)、小面孝作「平民と族称」(昭13)など。

5：家族史・家族社会学研究

士族の通婚圏を分析した小山隆「婚姻を通して見たる士族の社会」(昭7)、維新以来の秩禄処分、民法制定などが士族の家族制度にどのような影響を与えたかをとり扱っている青山道夫「講座家族1 家族の歴史」(昭48)、戸籍法と家制度の関係を論じた福島正夫編「戸籍制度と家制度」など、多様な研究がある。

これらの研究では、旧武士が次第に文化的側面での独自性を失いつつある過程が明らかにされている。小山の研究に見られるように士族が文化的に二極分解したという指摘や、大正期ですら有意に高水準の階級内婚がみられたことなど、注目に値する研究が多い。

6：社会移動研究

安田、麻生、高根らの他、族籍による教育利用の差を扱った教育社会学の一連の研究や、士族の城下町からの流出を扱った小山隆「士族の地域的移動傾向に就いて」(昭6)があるが、もっぱら士族と平民との対比にとどまり、士族内のどのような人々が教育機会を利用したのかは明らかになっていない。

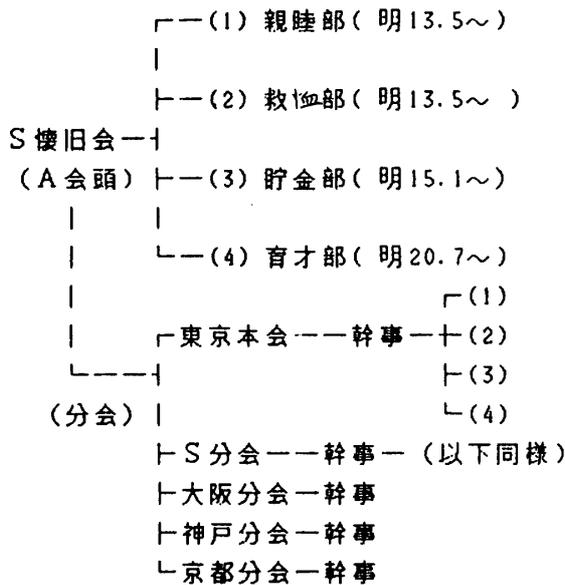
3. 懐旧会について

今回取り上げるS藩は譜代大名A家が治めていた小藩で現在の近畿地方B県S町に城下町を持っていた。廃藩当時701世帯であった旧藩士は其の後、S町にとどまる者、東京・大阪・神戸などへ移住する者などに分れたものの、旧藩主家との音信はなお継続していた者が多かった。旧藩主Aは旧領地・旧藩士等に対し廃藩後も様々な形で関係を保ち続けた。その一つは、明治9年にA家よりの出資をもとに設置されたH義塾(後のS中学)という私立学校であった。同塾の設置により旧藩士及び旧領民にとっての教育機会は著しく拡大した。

旧藩士とA家との関係を直接的に結んでいたものにS懐旧会という組織が挙げられる。

同会は、東京へ移住して来ていた旧藩士の消息を憂慮した旧藩主Aの「旧臣民の情誼を温め、或は困弊に陥る者を救い、或は産業に就くのを啓き、而して子弟の教育を併せ行はざれば」との考えを受けて明治13年に設置された組織である。

同会は次のような組織構成を持っていた。



各部の活動内容・資格は次の通りである。

- (1) 親睦部 ── 旧藩士の同志者が相互に拠金し、毎年各地で親睦会を開く。旧藩士族の戸主並びに士族の分家した戸主に限る。
- (2) 救 部 ── 戸主及び家族の死亡、水火風震の災による居宅焼失時などの見舞金贈呈。旧藩士族の戸主に限る。
- (3) 貯金部 ── 旧藩士相互の利益を謀り、期限を設け定額の積立貯金を行い、その増殖した金を各自産業の資に充てる。旧藩士族並びに旧藩改革の際帰籍せし勤仕10年未満の者及び士族の分家したる者に限り家族といえども加盟できる。
- (4) 育才部 ── A 会頭(旧藩主)より毎年付与される年200円と旧藩封内有志の拠金をもって、同封内士民の学資に乏しい子弟に資を給し、その才学を育成する。旧藩封内士民の戸主家族を問わず加入できる。

会の運営に当っては、会頭Aより七分利付

金禄公債証書五千円が貸与され、その利子が親睦・救恤両部の運営資金に充てられた。

S 懐旧会は、「相互に祖先の名譽を汚すことなきを保す」(「同会沿革」)ことを掲げ、相互の扶助・親睦を活動の中心として結成された組織であった。同会の性格は、とりもなおさず旧武士という社会集団の身分文化によって結ばれた特異な集団であったとみることができよう。

本報告では、こうした同会の性格を踏まえつつ、同会の活動、会員の動向、学校教育利用等を分析していく。

4. 士族層の解体と学校利用

S 藩の江戸詰藩士も明治初年に藩主とともに江戸から引き上げてきており、我々は旧藩士のはほとんど全部にあたる697戸の戸主名、石高、家格(上士、中士、上卒、卒)についてのデータを手に入れた。このデータを懐旧会の諸史料・H 義塾の書類等とつきあわせることで旧武士層のどのような部分が社会・経済的にどのような位置を占めるに至ったか、どのような部分が学校を利用し、その学校利用が其の後の人生にどう影響したかを、明らかにしようとする。

表1: 明治初年のS 藩士

	上士	中士	上卒	卒	計
江戸詰	77	32	74	3	186
在 藩	155	62	154	140	511
計	232	94	228	143	697

今回はその中間報告として次の点を中心に扱う。

明治9年に設置され同11年に公立中学、18~32年の間私立H 義塾、32年から私立中学となった、旧S 藩があった地域で唯一の中等教育機関であるH 義塾に明治17~20年に在籍した当藩士族の子弟71人を対象にとりあげる。

上で述べた藩士のデータの他、明治16年の各士族の生活状態に関するデータ、在籍生徒

の其の後の経歴との関連を検討する。

具体的には下に例を挙げたように71人の在籍生徒（士族）について一覧表を作成しており、分析結果については当日報告する。

< 例1 >

- ・上士, 130石, 在藩藩士の3男,
- ・明治16年の生活; A
(生活状態に就いては、「現今活計ニ差支ナク前途目的アルモノ」をA, 「営業自活之途ヲ需メテ未タ其目的ヲ得サルモノ」をB, 「現今生活ニ難キモノ」をCとする。)
- ・3学年以上で退学, 第一高中へ入ったが, 家庭の事情で中退, A家手伝い, 私塾塾主を経て東京高師教授, 東京に住む,

< 例2 >

- ・上士, 100石, 在藩藩士の長男,
- ・生活; B
- ・3学年以上で退学, 汽船会社機関手を経て機関長, 東京に住む,

< 例3 >

- ・上士, 50石3人扶持, 江戸詰藩士の長男,
- ・生活; B
- ・H義塾卒業, 陸士を経て任官, 歩兵大佐で退職, 東京に住む,

< 例4 >

- ・中士, 7石3人扶持, 在藩藩士の嗣子,
- ・生活; B
- ・H義塾卒業後身体をこわし軍人をあきらめ国民英学会を卒業, 外務書記生試験に合格して領事館に勤務,

< 例5 >

- ・中士, 7石3人扶持, 在藩藩士の長男,
- ・生活; B
- ・H義塾卒業, 陸士を経て任官, 陸大卒, 大正7年少将で退職帰郷, その後S町町長を長く勤める。

< 例6 >

- ・上卒, 4石2人扶持, 在藩藩士の長男,
- ・生活; B (明治初めに近郊農村に散居)
- ・H義塾卒業, 東京郵便電信学校を卒業して逓信省および東京逓信局に勤務, 昭和5年退官して4男と東京に住む,

< 例7 >

- ・上卒, 6石5斗2人扶持, 在藩藩士の長男
- ・生活; A
- ・H義塾卒業後陸士に入り任官, 明治42年に砲兵少佐, 大正9年に病没,

＊＊社会移動史研究について＊＊

ここ15年ほど歴史学と社会学の接点で, 社会移動に関する実証的な研究が蓄積されつつある。近代化の進展とともに移動量が増加するといった一昔前の単純な予言に代って, 歴史的な長期変動の中での具体的な社会集団の成立・解体の問題に社会移動が関連づけられるようになってきた。S, サーンストロームの"Poverty and Progress" (1964)などが出発点になり, 産業革命や政治的大変革が社会階層や社会移動に与えた影響を数十年・数百年のタイムで考察するような研究視角がそれである。欧米ではH, カエルブリーが手際よくまとめているように("Historical Research on Social Mobility" 1981)社会移動史として厚みのある一つの研究領域となってきた。

日本における社会移動の歴史的研究としては中央レベルのデータを使った安田三郎「社会移動の研究」や, 麻生誠や高根正昭のエリート研究などがなされているが, 地方レベルのデータを発掘して研究領域を広げる努力はなされてこなかった。

我々は士族と教育の結びつきを, 近代における社会移動の中心的なテーマである社会移動と教育の関連のいわばプロトタイプとして考察の対象にすえる。